

〈訳注研究〉

# 『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記』 試訳（1）<sup>1</sup>

渡 邊 温 子

はじめに

チベットの仏教聖者ミラレーパ (Mi la ras pa bzad pa'i rdo rje, 1040-1123) は、今なお世界中で広く人気を集めている。現在、諸々のミラレーパ伝の中で、一般的に流布しているのはツァンニョン・ヘールカによって編纂された『瑜伽自在者たる聖者ミラレーパの伝記——解脱と一切智者への道説示 (rNal 'byor gyi dbang phyug dam pa rje btsun mi la ras pa'i rnam thar thar pa dang thams cad mkhyan pa'i lam ston)』(以下『道説示』)と『尊者ミラレーパの伝記を廣大とした十万歌 (rJe btsun mi la ras pa'i rnam thar rgyas par phye ba mgur 'bum)』(以下『十万歌』)である<sup>2</sup>。ミラレーパに関する最も古い伝記を著したのは、ミラレーパの直弟子であるゲンゾンレーパ (Ngan rdzong byang chub rgyal po) とガムポパ (sGam po pa bsod nams rin chen, 1079-1153) である<sup>3</sup>。このうち、ゲンゾンレーパを中心と

1 現在では一般に Mi la ras pa と綴られる。翻訳に関しては Mid la ras pa という表記にもとづいてミラレーパと訳した。なお、この度翻訳を試みたテキストの中には mi la の表記も混在するが、mid la で統一して訳した。

2 日本では、河口慧海氏によって1931年に『苦行詩聖ミラレーパ—ヒマラヤ山の光』として刊行された。また、おおえまさのり氏による伝記と歌の翻訳もあるが、『十万歌』については Chang 氏によって翻訳された *The Hundred Thousand Songs of Milarepa*、伝記については Wentz 氏によって翻訳された *Tibet's Great Yogi Milarepa* からの重訳である。なお、『十万歌』の一部は、佐藤氏によって翻訳されている (佐藤1990 ; 1991 ; 1992 ; 1993 ; 1994a ; 1994b)。

なお、ツァンニョン・ヘールカの『道説示』『十万歌』『マルバ伝』を含めた、大谷大学所蔵のチベット語文献の一部は、電子テキストとして入力され、真宗総合研究所西藏文献研究班のHPで公開されている (<http://web1.otani.ac.jp/cr/twrpw/results/e-texts/>)。

3 ミラレーパ伝の成立過程に関しては Quintman 氏が綿密に研究している (Quintman 2014)。

した12人の弟子たちによって書かれたミラレーパの伝記が、今回和訳を試みる『大尊者ミラレーパの甚深なる伝記 (*rJe btsun chen mo mid la ras pa'i rnam thar zab mo*)』（以下『甚深伝』）である<sup>4</sup>。これはツァンニョン・ヘールカの作品、特に『十万歌』に大きく影響を与えた作品である<sup>5</sup>。『甚深伝』は、「出自に関して苦行を行じる功德」と「三昧に関して実践を行じる功德」の2部に大別される。そのうち前者がツァンニョンの作品でいうところの『道説示』、後者が『十万歌』に相当する<sup>6</sup>。以下、『甚深伝』の目次を列挙する。

1. 出自に関して苦行を行じる功德
2. 三昧に関して実践を行じる功德
  - 1) 輪廻の真髄はないという功德
  - 2) 夢が印として現れる功德
  - 3) 楽の温もりを悟る功德
  - 4) 衣食への渴望を離れる功德
  - 5) 経験が楽として現れる功德
  - 6) 証悟が道として現れる功德
  - 7) 現れが順縁として現れる功德
  - 8) 世間八法<sup>7</sup>が静まる功德

4 奥書には、修行者たちのためにゲンゾン・トンパ・ポディーラージャをはじめとする12人の弟子たちが、文字に起こしたものとある (*rnam thar 'di skal ldan sgom chen rnam kyi don du/ ngan rdzong ston pa bho dhi rā dza la sogs pa'i bu chen bcu gnyis kyi yi ger bkod pa'* 『甚深伝』516)。なお本作品は、英語では Quintman 氏によって *the Twelve Great Disciples* のタイトルに訳された。今回は中国藏学出版社から出版された『ミラレーパ全集 (*rJe btsun mi la ras pa'i gsung 'bum*)』の第1巻に収められている作品を用いたため、そのタイトルをとって『甚深伝』と訳す。なお、今後『甚深伝』の翻訳作業を続けるとともに、中国藏学出版社で出版されたテキストを底本として、オックスフォードとニューアークにある写本との校訂作業を予定している。

5 『十万歌』は『甚深伝』の歌に修正や移動を加えた作品である。一方、ミラレーパの人生を描いた『道説示』は、大幅に加筆修正されており、ツァンニョン自身の作品と言って過言ではない。

6 さらに詳しい概要については、Quintman 氏作成の表を参照 (Quintman 2014, 211-216)。

- 9) 論争によって害されない功德
- 10) 恩を報じる功德
- 11) 偉大な行いの功德
- 12) 神の神となる功德
- 13) 智慧の燈明が灯る功德
- 14) 力が強い功德
- 15) 加持が大きい功德
- 16) 三昧の力が円満となる功德
- 17) マハームドラーを教える功德<sup>8</sup>
- 18) 一生で双入である金剛身を成就し、虹身となって消えてゆく様を示す功德<sup>9</sup>

これらのうち、第一部「出自に関して苦行を行じる功德」の前半部分の訳出を試みたい。

#### 凡例

1. 本和訳に際して中国藏学出版社刊行の活字本を底本とした。訳内の〔 〕の番号は、中国藏学出版社刊行の活字本の頁番号である。
2. チベット語の表記は拡張ワイリー方式を採用した。
3. 見出しは適宜訳者が補った。
4. 訳内の〔 〕は理解を助けるため、訳者が訳を補った。
5. 人物の生没年を（ ）に入れたが、生没年ともに不明な場合は省略した。

---

7 利得、損失、賞賛、避難、名誉、誹謗、楽、苦の8つ。これらの8つは、ミラレーバによって繰り返し否定される。

8 17章は、『甚深伝』全体の3分の1の分量を占めており、この章に重点がおかれていることがわかる。ガムポバに教えを受ける場面も、この章に含まれる。『十万歌』に所収されるガムポバの逸話に関しては、拙稿を参照されたい（渡邊 2009）。

9 最終の第18章は、『道説示』の最後の部分に相当する。

## 『大尊者ミーラレーパの甚深なる伝記』

## 1. 帰敬偈

ラマに帰依します  
 チベットの中央に生を受け  
 世間八法に汚染されることなく  
 ナーローパ<sup>10</sup>の伝統によって加持された  
 御教えを行じた素晴らしい方  
 衆生の病を癒す、最高の医者であり  
 太陽と月のように高名な礼拝の対象  
 ミーラという名で普く知られる  
 レーパ<sup>11</sup>に礼拝し、礼賛します  
 輪廻は空虚であると御心に立ち上り  
 衣食の欲望を離れ、山中をさすらい  
 楽の温かさを悟り命の要点を解された  
 尊者ミーラに礼拝し、礼賛します

## 2. 開題

一切の勝者の教主であり、金剛乗の秘密を普く成就された方、インドの善知識である文殊菩薩の化身であり、北方に位置するチベットにおいて無比なる偉大なミーラレーパには二つの福德がある。出自に関して苦行を行じる福德と、三昧に関して実践を行じる福德の二つである。

10 インドの成就者。ミラレーパの師匠であるマルパ翻訳師（Mar pa chos kyi blo gros, 1002-1097）は、ネパールとインドから仏教、特に密教の教えを授かりチベットに持ち帰ったが、彼の中心的な師である。マルパ翻訳師がナーローパからどのような教えを授かったかについては拙稿を参照（渡邊 2012）。

11 ras pa.「布をまとった人」の意味。ミラレーパに従った弟子たちも、同じように〇レーパという名で呼ばれる者が多い。

## 3. 出自に関して苦行を行じる福德

## 1) 誕生と苦難

御生誕の地はグンタン (gung thang)<sup>12</sup>、家系はキュンポ (kyung po) である。父親はミーラ＝シェーラップ・ギャルツェン (She rab rgyal mtshan)、母親はニヤンサ・カルゲン (Nyang za dkar rgyan) である。<sup>13</sup> [彼らに] 息子と娘の2人があった。そのうち偉大な尊者の名は、[2] トゥパガー (Thos pa dga) といった。

尊者が7歳の時、父親が亡くなった。父親の兄弟たちが話し合っ、畑と家、全ての財産を奪い取った。母は子ども二人をやせ細らせ、死ぬぎりぎりの量しか [食べ物] を与えなかった。

「はは、お前ら母子は殺してやらないと駄目なようだな」と [親族に] 脅された。そこで、息子はニンマ派の人から文字を教わった。<sup>14</sup> 母は物乞いをした。

ある時、母子は結婚式に出くわした。母は、

「あいつらは私たち親子にこんな仕打ちをしたんだ」

と泣いた。息子は、

「私は何も出来ず、方法がありません。さあ、泣かないで」

と言った。

「お前が文字を習ったように、呪術を学んだらどうだい」

と [母が] 言うので、

「呪術を誰のもとで学ばいいのです？ どうすればいいのですか？」

と [息子が] 言うと、母は、

「資金はマーモットの穴に隠してあります。それを元手にし、ユントンパの<sup>15</sup> 呪術が強力だから、そこに行きなさい」

と言った。

12 ラサから西のガリ (mnga ris) 地方に位置する。

13 『道説示』では、ミラレーパの幼少期により紙面を割いて劇的に描かれる。特に母親であるカルゲンは、個性的な人物として描かれている。彼女のミラレーパに対する影響について、「逆縁」という観点から拙稿で論じた (渡邊 2010)。

14 ミラレーパがマルパに師事する以前にどのような教育を受けたのかという問題に関しては、Martin1982を参照。

15 g'gyung ston pa. チベット土着の宗教であるボン教の教師。

〔母からの〕資金でセルポテルタク (Ser po rtel grags) という牡馬を購入した。そして4袋の食料を〔馬に〕積んで、呪術を学ぶ6人の者と連れ立って行った。ウー (dbus) とツァン (gtsang)<sup>16</sup> の二地方では、ユントンパよりも呪術の強い者はいないと言われ、その道は百あると言われるほど有名であった。密教行者で白髪まじりのユントンに、馬と染料をささげて、仲間と一緒に呪術を学んだ。一年が経った時、仲間たちは、

「呪術を学んだから戻ろう」

と言ったが、トゥパガーは、

「私には行き場所などどこにもありません」

と〔師に〕申し上げた。

「お前は哀れで、不適切な呪術が必要なようだ。ならば、もう少し留まりなさい。私が相伝している、「赤黒い顔のラーフラ (gza' gdong dmar nag)” という強力な〔3〕教誡がある。しかし、私はタナクポ (rTa nag po) というボン教徒に譲った。広く知られる呪術を学ぶならば、彼のところへ行きなさい」と言われた。しかし、供物がなく躊躇していると、<sup>18</sup>

「お前はこのような馬を持って来たが、供物として渡してはならない。トンラタク (stong la grags) という私の白馬を持って行きなさい」

と言われ、白馬と、彼の息子が案内として送られた。ユントンの息子が、経緯を仔細に語ったので、タナクのボン教徒であるラジェ・ヌプチュン (lHa rje snub chung)<sup>19</sup> は、

「彼には呪術が必要なようだ」

と言った。

ボン教徒は、〔ユントンパの〕息子とトゥパガーの二人に呪術を教えて参籠させた。3年間かかるところを、ミーラは精神力が強かったため、3ヶ月で成し遂げた。梅檀の金剛蔵があったので、足の早い二人に託して、

「これを私の母の手に渡して、父の兄弟たちの御殿を囲ってください。母に早く送り届けてください」

16 中央チベットとギャンツェから西の地域。

17 se 'ba' le ba. 「白髪交じりの」の意味でとる。

18 a'u gngang byas pas. 「躊躇した」の意味でとる。

19 ラジェという名前から、医者であったことが推測される。

と〔トッパガーは〕言った。母は怒りから、御殿にたくさん〔金剛蔵を〕打った。下女が見てみると、3歳の牛ほどの〔大きさの〕トカゲが、御殿の柱をひっぱっているのが見えた。ミーラの叔父の結婚式で、母は御殿にもたくさん〔金剛蔵を〕打った。中も外も壊れなかったが、柱が崩れて御殿が倒れた。25人が死に、叔母一人が残った。

母はある限りの金をかき集めて、使者の外套の裏に見えないように縫い付けた。そしてその上に黒い継ぎ当てをした。〔そして使者に託した〕手紙の中に、  
「息子よ、お前に強力な呪力が生じましたね。数年は〔4〕故郷に戻ってはいけません。糧が無ければ、高価な西方の黒雲の下をよく見てみなさい。糧があります」

としたためてあったが、最初意味がわからなかった。ポン教徒の妻がわかって、  
「お前には聡明な母がいますね」  
と言った。

故郷の人々は、

「このような呪術のせいで、死にこそしなかったが、村が破壊された！」  
と言った。そこで、〔母は〕再び手紙を〔トッパガーに〕送った。〔トッパガーは、〕

「今、私に恨みを抱くものがやって来たとしても、呪術をかける！」  
と言って、ポン教徒の息子と二人で雹〔の呪術〕を成就して、雹を降らせた。悪口を言った者たちに雹を降らせたので、〔彼らは〕悪口も言えなくなった。

雹〔の呪術〕が仇となり、村中に雹が降った。無意味に多くの木と建物が失われ、岩鼠や鳥小鳥がたくさん死んだ。村人たちは怒って雹を降らせた者を探しにやって来た。ユントンには、力持ちの小人<sup>20</sup>よりも力が強い召使いと、馬よりも早い召使いの二人がいた。彼らに剣を抜かせて、

「私はミーラだ！さあ、来い！」

と言わせた。〔村人は〕一人として〔彼らを〕捕まえることは出来ず、〔二人の召使いは〕逃げ去った。その後で、ユントンの息子とミーラの二人は隠れて逃げ、ユントンのもとへとたどり着いた。〔ユントンは〕雹を見に行き、

「多くの生き物が死に、困ったことになった」

20 gyad. チベットの伝説の生き物。身体は小さいが力が強い。

と言った。そして、〔トウパガーについて〕 トウチェン<sup>21</sup>という名が広まった。

〔トウチェンは〕深く悔恨した。

ある時、〔トウチェンは〕ユントンのもとへ会いに行った。

「ユントンパ、ユントンパ」

と呼ぶと、〔ユントンが〕泣いていた。

「師よ、どうされたのですか？」

と〔トウチェンが〕言うと、

「大変なことになった。上の村でも多くの人が死んだそうだ。下の村でも  
[5] 人が多く亡くなったそうだ。この中央の村でも多くの人が死んだ」

と〔ユントンは〕答えた。〔トウチェンが、〕

「人が亡くなることは耐え忍び、泣くべきではありません」

と言うと、〔ユントンは、〕

「私たちも死ぬ。私は、自身でも多くの悪業がある上に、お前にも恐ろしい悪業を積ませてしまった。我々は地獄に墮ちる他ない。今、心から恐れ、悔いて泣いているのだ」

と言った。〔それを聞いて、トウチェンは〕恐れを感じた。

「師よ、確かですか!？」

と尋ねると、〔ユントンは、〕

「ボン教徒にも訊いてみるがいい」

と言った。そこでボン教徒のもとへと行った。すると、ボン教徒も泣いていたので、

「どうしたのですか？」

と〔トウチェンは〕尋ねたが、ユントンの言った通りだった。〔トウチェンは〕心苦しくなり、ユントンパのもとへ戻り尋ねた。

「さあ、どうしたらいいのでしょうか？」

「お前は精神力が強いので、法を行え。出来る限り精進するのだ」

「法〔を教わるの〕に誰がふさわしいですか？」

「ロントン・ラガ (Rong ston lha dga') がゾクチェン (大究竟) に優れている

21 A khu mthu chen. 大呪術師。『道説示』では、マルパがトウチェンと名付けることになっている（『道説示』26a）。これ以後、ミラレーパの名を、トウパガーからトウチェンの呼び名に変更する。

ので、彼のもとへ行け。資金は私が援助しよう」

そこで〔トウチェンは〕ロントンのもとへと行った。ロントンは、

「お前が来たのは良きことだ。私には、間違いない教誡で、悪業を積んだ者を強力な方法で成仏させるゾクチェンという、しっかりと根を張り、頂が高く、葉が生い茂り、朝聴聞すれば朝に成仏し夜聴聞すれば夜に成仏する法がある」と言った。〔トウチェンは〕嬉しくなって、ゾクチェンを授かり修行した。昼夜の区別なく、刹那も放逸とならずに〔トウチェンが〕精進しているのをラマはご覧になった。ラマは危惧されて、「この者はこんなに精進しているというのにどうしたことだ。何か障りがあるのならどうしようもない。〔6〕そもそも、信仰は深いようだ」と考えた。ある日突然、

「ここに来なさい」

と〔ロントンはトウチェンに〕言った。

「私のこのゾクチェンの教えは、見解は空のように高く、修行は経験によって測ることは出来ず、行は一切の悪しき方法を尽きさせる。私にも〔お前に悟りが生じないのは〕信じられなかったので、妙妃金剛忿怒仏母の念誦に励んでみた。南の川が流れる上手に、ロダク (lho brag)<sup>22</sup> のマルパという者がいる。その甚深なる方便道の法を、お前がよく信頼していると〔妙妃金剛忿怒仏母が〕おっしゃっているのです、そこに行つてはどうだ」

と言われた。信じられず、「信頼していない阿闍梨の法を实践したところで何になろう」と思っていると、

「マルパは縁の残りが集まり、証悟が心に生じている。お前は疑わずに行きなさい」

と〔ロントンが〕言うので、〔トウチェンは、〕

「では、どうすればよろしいでしょうか？」

と尋ねた。〔ロントンは、〕

「私が道中の糧としてツァンパを与えるので、〔マルパのもとへ〕行くが良い」と答えた。そこで、たくさんのツァンパの上にゾクチェンの経を載せて旅立った。水辺で靴を脱いで、不意に経の上に載せて進んだ。道の途中で、数人の若

22 ラサの南にあるヤルドクユム湖 (yar 'brog gyum mtsho) の更に南、ブータンとの国境近くに位置する。この場所には、ミラレーパが建てたセンカルグトー (sras mkhar dgu thog) と呼ばれる城が、現存している。

者と出会った。

「あなた、経の上に靴を載せるなんてなんだ」

〔トウチェンは〕 恥ずかしく感じた。そこで〔トウチェンは、〕

「私は遠くから来たため、疲れていたせいです」

と答えた。〔すると若者は、〕

「これからどこに行くんだい？」

と言うので、〔トウチェンは、〕

「ロダクのマルパのもとに法を授かりに行きます。どこにおられるか知っていますか？」

と尋ねた。〔一人が、〕

「知らないな」

と答えたが、〔一人は、〕

「俺は知ってるよ」

と答えた。〔他の者が、〕

「はは、誰のことだ」

と言うので、〔その男は、〕

「ロドゥー伯父のことだ」

と答えた。

## 2) マルパのもとでの苦行

〔7〕〔トウチェンが〕 青年たちに教えられた道をゆくと、白土の上で、年老いてさらさらした髪<sup>23</sup>の行者が畑を耕していたので、その人に尋ねた。

「マルパはどこですか？」

「お前はまだ会えない。何の用だ？」

「私は法を教わるのです」

「おやおや、お前のような者に法は得られまいよ。捧げものがたくさん必要だから、難しいだろう」

「では、どうしたらいいでしょう？」

23 skra sil li ba.「さらさらした髪」の意味でとる。なお『道説示』では、マルパについて、「身体が大きく、肥えて、目が大きく、素晴らしい僧侶」と優れた容姿で描かれる（『甚深伝』24a）。

「どこにおられるかは、私以外誰も知らない。さあ、お前は私の畑を耕せ。私が見て来よう」

〔行者は〕地面に絵を描いて、

「ここまで耕せ」

と言って去った。<sup>24</sup>

日が暮れると〔先ほどの行者が〕現れた。

「さあ、お前のツァンパで食事にしよう。私が食べてやろう」

〔と言った。〕それから、

「さあ、お前は勤勉なようだから私の土地を耕せ。私が駄賃として、金を少しやろう。それを供物として〔マルパに〕お会いしろ」

と言って去った。土地を一ヶ月で耕し終わり、賃金をもらうおうと考えていた。するとある日突然、

「ラマにお会いするなら来い」

と伝えに人が〔トゥチェンのもとへ〕送られてきた。

「あの行者が、私が〔マルパに〕捧げるために金を持ってきてくれるので、少し待ってははどうでしょう？」

と〔トゥチェンが〕言うと、

「いつでもラマにお会いできるわけではない。お会いするなら来なさい」と言われた。そこで付いて行くと、あの顔見知りの行者に対して、人々が礼拝していた。驚いて不思議に思っていると、

「私は世俗の行いに満足しない。一切はかくの如きである。お前が必要とするラマは私である。疑いを抱かずに礼拝せよ」

と言われたので、〔トゥチェンは〕礼拝し、〔ラマの〕御足に触れて、言った。

「聖なるラマに身口意の三つを捧げます。衣と〔8〕食と法の三つをお授けください」

「三つ全ては与えられない。どれか一つを授けるので、自分で選べ」

「では法をお授けください」

「そうしよう。お前の身口意の三つをどうするかは私の自由だ」

24 『道説示』では、ここでマルパが自分が飲みかけた酒をミラレーパに渡し、ミラレーパがそれを飲み干す場面が描かれる。ミラレーパがマルパの教えを完全に受け継いだことが象徴的に描かれている（『道説示』24a-24b）。

と〔ラマは〕言ってから、

「その経は私の仏間に持ち込むな。私の護法尊が風邪をひく」

と言うので「〔ラマは〕これを重視していない」と〔トゥチェンは〕思って、目立たぬ所に置いた。

それから托鉢をして法を授かろうと考えたが、

「馬鹿者<sup>25</sup>！」

と叱責された。「さあ法が授かれるだろう」と考えたが、

「城を建てよ」

と言われて、築城作業と畑仕事、〔ラマの〕妃の火〔起し〕と水〔汲み〕、木〔拾い〕などの小間使いをさせられた。その結果、妃は〔トゥチェンのことを〕氣にかけた。ラマがどうすれば喜ぶかわからないまま、土と石を運んだが、背中に大きな荷ずれが出来た。妃は〔トゥチェンを〕数日休ませ、ラマに言った。

「人に大きな荷ずれが出来るなど見たことはありません」

〔するとラマは、〕

「報酬は、受け取った仕事では不相応だ。荷ずれはしばらくすれば治る」

と言った。〔トゥチェン〕法を授かれないまま、夜も昼も石を運んだので、疲れ果ててしばらく倒れた。ある時、たくさんの人々が、

「灌頂を授けてください」

と言って集まっていたので、

「私にも彼らと一緒に灌頂を授けてください」

と、〔トゥチェンも〕お願いしたが、

「お前には、灌頂を受けるための供物があるのか？」

と言われた。そこで、妃のもとへ行き、少しのバターをもらったので、それを持って行った。

「私の供物はこれです」

と〔トゥチェンが〕言うと、〔ラマは、〕

「これをどこで手に入れた？」

と言った。

「これは妃が私にくださったのです」

25 thog 'joms pa re. 意味を確定しかねるが、罵るための言葉と推測される。

「これは私のバターだ。お前の供物には [9] ならない」

〔灌頂を〕受けられなかったので、〔トゥチェンは〕落胆した。妃のもとへ行くと、

「師が何を考えておられるのかわかりません。お前は気を落としてはなりませんよ」

と〔妃が〕言った。その通りだと思って、再び築城のための土と石を運び続けた。疲れて休憩したが、しばらく気を失った。まず、半月の〔形をした〕城を築いた。〔するとラマは、〕

「私が間違った。取り壊せ」

と言った。それから南に肩甲骨のような城を建てたが再び、

「私が間違った。取り壊せ」

と〔ラマに〕言われ、土は土のもとあった場所に、石は石のもとあった場所にまた運ばされた。それから西に丸い城を築いたが、

「これも犬小屋ようになった。行者の城は三角形である必要がある」と言われた。

その時、〔妃〕ダクメーマ (bDag med ma)<sup>26</sup> が、

「〔マルバが〕喜金剛父母の甚深な灌頂を受けられます」

と言ったが、その通りたくさんの人が集まっていた。

「今回は私にもお授けください」

と〔トゥチェンが〕言うと、〔ラマは、〕

「お前に供物があるのか？ 供物がなければ授けることはできない」

と言うので、〔トゥチェンは〕妃にお願いした。素晴らしいトルコ石をもらい、それを持って行った。〔するとラマは、〕

「これをどこで手に入れた？」

「妃が仕事をした賃金として私にいただきました」

「妃のトルコ石か。妃も私のものだ。私の財産では私への供物にはならない。そもそもお前は身口意の三つを私に捧げたのだから、賃金をやる謂われはない」

26 ダクメーマはヘーヴァジュラの妙妃の名前。『ホロン仏教史』によると、マルバは9人の女性とヘーヴァジュラの行を実際に行ったが、その中心的存在がダクメーマである（『ホロン仏教史』41-42）。

と言った。落胆し、去った方がいいのではないかと考えた。妃に告げると、妃は俱生行<sup>27</sup>を授けてくれたので、慰められた。

[10] それから築城作業を続けていると、盗賊が出たため、ラマへの供物が絶えた。そのため [ラマは、

「お前はここに雹を降らせよ。私は教誡を授けよう」

と言った。雹を降らせたので、盗賊たちの住処は壊れ、盗賊は死んだ。

「さあ、授けてください」

と [トゥチェンが] ラマに頼むと、

「人を殺した代価として教誡を与えるのは相応しくない」

[と言われたので、]

「ならば出ていきます」

[とトゥチェンは言ったが、マルパは]

「さっさと行け」

[と言った。] 妃にも、

「私は出ていきます」

と [トゥチェンが] 伝えると、妃はラマに、

「この者は仕事と呪術を私たちのために行い、これほどまで成し遂げました。この者に教誡を与えずに送り出すなど、師として恥知らずではありませんか？」

と言われた。[ラマは、]

「奴は身口意三つを、私に捧げた。去っても幸せにはなるまい」

と言うので、[ダクメーマは、]

「師は無愧です！」

と言った。そこで、小麦の粉と実を持たされ、[ラマのもとを] 送り出された。その夜、洞窟の入り口で眠ると、雪がどっさり降った。暖をとるために薪と鍋を支える石を探して右往左往した。またトゥク<sup>28</sup>パを温めるのに、他にもしなければならぬので、いろいろ考えた。「私一人だからとツァンパをこねたが、中を温めるのに他にもしなければならぬことがこんなにも生じた。以前の仕

27 lhan cig skyes sbyor. サハジャヨーガ。

28 うどんやすいとんのような汁の食べ物。

事は、半分はラマのためだが、半分は自分の食べ物のための仕事だ。ラマは気にかけてくださらなかったが、妃が休憩の時に食べ物で〔私を〕満たしてくれた。喉の乾きを鎮めてくださったのも恩深い。〔私には〕行き場所などどこにもない。ラマにもこのような教誡があるというのに授かっていない」と思って、雪も構わず〔ラマのもと〕へ戻って行った。妃は〔11〕非常に喜ばれて、

「お前が帰ってきてよかった。ラマもしばらくすれば教誡をくださるかもしれません」

と言った。妃はラマに、

「トゥチェンが私たちを見捨てずに帰ってきました。教誡をお授けください」

とお願ひしたが、〔ラマは、〕

「私たちを見捨てなかったのではない。あいつを〔私が〕見捨てなかったのだ。さあ、私の城を建てる手伝いをしろ。教誡が降ってこよう」

と言った。〔トゥチェンが〕

「今回はどのような城を建てますか？」

と尋ねると、〔ラマは、〕

「三角の城は、鎮魔孔<sup>29</sup>のようになったので相応しくなかった。四角で八方向の頂に宝が燃えるような城を建てよ」

と言った。そのように〔城を〕建てるため、〔トゥチェンが〕石を運んでいた。

〔その時〕供物を捧げに来るニエル<sup>30</sup> (gnyal) の者たちが、南西の盗賊のせいで来られなくなった。〔ラマは、〕

「さあ、こいつらに雹を降らせよ。罪にはならない教誡が私にはあるから、すぐに授けてやろう」

と言うので、〔トゥチェンは、〕

「そのようなことをおっしゃらないでください。私は罪を清められるのではないかと思って、法を授かりに来たのです」

と言った。だが妃が、

「今回は、他と似つかず悪事が過ぎますから、雹をお降らせなさい」

29 魔を沈めるために火を炊ための三角の穴。

30 ロカ (lho kha) 地区に位置する。『藏漢大辞典』によると、チベット文字と文法書を作ったトンミ・サンボータ (Thu mi sam bho Ta, 7c) の故郷。

と言うので、妃の言葉を断れず、雹を降らせた。しかし〔ラマは〕法を授けることを反故にされたので、トゥチェンは泣いて、

「私は罪を積んだため、法を授かりに来たのです。墮ちる地獄の底がどんなに深いかを見た気がしました。自分は重い悪業を積んだので、他の所へ罪を清めに参ります」

と言ったが、〔ラマは、〕

「他へ行っても罪は清まらぬ。罪を清めたいと思うならば、私のこの立派な城を建てて手伝いをしろ。他に行き場などない。行ったとして、どうにもならぬ」

と言った。すると妃が〔トゥチェンに〕、

「師はお前に対して無愧になさいます。よい行き場がありますよ」  
と言った。〔妃は〕ナーローパの数珠と〔12〕髪、布などを、〔トゥチェンを〕哀れんで与え、ラマに酒をいっぱい飲ませて眠らせた。そして、隠れて見つからないようにゴクトンパ (rNgog chos kyu rdo rje, 1036-1097)<sup>31</sup>のもとへ学びに送った。その後、ラマは目覚めた。〔ラマが〕

「私の息子、トゥチェンはどこに行ったのだ」  
と尋ねると、〔妃は、〕

「私たちが無愧に振舞ったので、生活に困窮して乞食にいきました」  
と答えた。すると〔ラマは〕、

「何ということだ」

と言って、しばらくの間、半眼になって、

「私の息子をどこにも行かせてはならぬ。ロバの耳のように、常に私の側にいるようにしたのだ。<sup>32</sup>そもそも、妃よ、お前も私が何を考えているか知らずに疑ったのだ」

と言った。

立派な城を建てて聞法解脱に赴くとは、〔トゥチェンには〕考えが及ばなかった。それらの築城作業を通してミーラの罪障は清められた。中央に〔城を〕

31 ゴクトンパは、マルパに出会う以前からたくさんの信者を有するラマであった。マルパに師事した後は、自分自身の信者を、マルパのもとへ聴聞させに送った（『マルパ伝』23b4）。

32 rang la 'khor sa zhig tu song zin. 「私の側にいる」の意味でとる。

建てたのは、〔マルパの〕父方の兄弟たちが〔建物を〕建ててはならないとしていた場所だった。そのため、父方の兄弟たちを欺くためと、ミーラに息災・増益・〔敬愛・〕降伏の四行などを成し遂げる縁起として〔ラマは城を〕建てさせたのだった。ミーラレーバがマルパのもとで行った苦行は想像を絶するものであった。妃が一番下で支えた<sup>33</sup>。ラマも不快を装ったが、喜びも想像を絶するものであった。罪が清まることも不可思議であった。〔トゥチェンを〕聞法解脱させようと〔ラマは〕考えたが、思い通りにならなかった。

### 3) ゴクのもとへ

〔トゥチェンは〕ゴクトンのもとへ赴いた。ゴクトンは、  
「トゥチェンよ、〔私が〕呼ぶ前にあなたが来てくれてよかった。これはラマのお陰です」

と言った。ダクメーマから贈り物であるティロー〔パ〕<sup>34</sup>とナーロー〔パ〕の御髪と、数珠、〔13〕布などを捧げた。〔トゥチェンが、〕

「私は罪深い者ですので、どうか法をお授けください」  
と言うと、ゴクトンパは法を説いたその口で、

「最近、私の〔もとにいる〕僧侶が市で商談している。あなたはそこに電を降らせなさい。教誡は私が知っています」

と言った。ラマの願いを断れず、電を降らせていた間に、村中の穀物がだめになってしまった。空の鳥と地中の鼠、地上の多くの動物が死んだ。盗賊たちの頭に電が降ったので、みな被害を受けた。トゥチェンは、動揺してしまった。急いでそちらに行ってみると、死体の山の下にも、小鳥の死骸があった。それを服の裾いっぱいに入れて、ラマ・ゴクトンパのもとへ行った。〔トゥチェンが、〕

「私は仏の教えを請いに来たのです。〔それが〕今や地獄行きが早まりました。底なしの恐ろしい罪を犯してしまいました。ああ、私はどこに行ったらよいのですか」

と言うと、〔ゴクは、〕

33 bzhon stegs yan chad byas pas. 直訳すると「踏み台以上のことをした」の意味。

34 ナーローパの師匠。ティローバがナーローパに対して課した苦行は常軌を逸しているが、密教における姉弟関係を考察するための資料として非常に重要である。

「問題ない、何も心配することはありません。小鳥の死骸をこの火の中にお入れなさい」

と言って、目の前で炊いた火の中に、小鳥の死骸を投げ入れた。ラマが指を弾くと、〔小鳥が〕空へとチュンチュンと飛んでいった。現れに利益が生じたということである。

（未完）

### 略号および文献表

rTa tshag tshe dbang rgyal

*lHo rong chos 'byung*. Bod ljong bod yig dpe rnying dpe skrun khang. 1994.

【略号『ホロン仏教史』】

gTsang smyon he ru ka rus pa'i rgyan can

*sGra bsgyur mar pa lo tsā ba'i rnam thar mthong ba don yod*. 大谷大学真宗総合研究所西藏文献研究班所蔵の木版本（蔵外 no. 11853）。【略号『マルバ伝』】

*rJe btsun mi la ras pa'i rnam thar rgya par phye ba mgur 'bum*. 大谷大学図書館所蔵の木版本（蔵外 no. 11856）。【略号『十万歌』】

*rNal 'byor gyi dbang phyug dam pa rje btsun mi la ras pa'i rnam thar thar pa dang thams cad mkhyan pa'i lam ston*. 大谷大学図書館所蔵の木版本（蔵外 no. 11854）。【略号『道説示』】

Mi la ras pa bzhad pa'i rdo rje

*rJe btsun chen mo mid la ras pa'i rnam thar zab mo*. In *rJe btsun mi la ras pa'i gsung 'bum*. vol. 1, dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang. 2011.

【略号『甚深伝』】

Martin, Dan

1982 “The Early Education of Milarepa.” *The Journal of the Tibet Society* 2: 53-76.

Quintman, Andrew

2014 *The Yogin and the Madman: Reading the Biographical Corpus of Tibet's Great Saint Milarepa*. New York: Columbia University Press.

おおえまさのり

1983 『ミラレパの十万歌—チベット密教の至宝』いちえんそう。

1992 『ミラレーパーチベットの偉大なヨーギー』 めるくまーる。

河口慧海

(1931) 2010 『苦行詩聖ミラレーパーヒマーラヤの光』 河口慧海著作選集3、慧文社。

佐藤道郎

1990 「ミラレーパのヨーガの世界」 *Artes liberales* 46: 35-47。

1991 「ミラレーパのグルブムにかえる婦人の問題」 *Artes liberales* 48: 1-16。

1992 「ミラレーパの接得法 (1)」 *Artes liberales* 51: 1-10。

1993 「ミラレーパの接得法 (2)」 *Artes liberales* 53: 11-34。

1994a 「ミラレーパ『十万歌謡』第18、19章和譯」 *Artes liberales* 54: 27-38。

1994b 「ミラレーパ『十万歌謡』第8、10、11、20、21章和譯註」 *Artes liberales* 55: 21-45。

渡邊温子

2009 「『ミラレーパの十万歌』「聖者ガムボパの章」和訳」『真宗総合研究所研究紀要』28: 73-126。

2010 「逆縁としての母—ミラレーパを育むニャンツァ・カルゲン」『印度學佛教學研究』58(2): 1026-1033。

2012 「カギュー派の源流」『印度學佛教學研究』61(1): 446-449。

(本研究は JSPS 科研費 JP17K13334 の助成を受けたものである。)

